

事業所名 : グループホーム おらほの家

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0370800211		
法人名	特定非営利活動法人 明成会		
事業所名	グループホーム おらほの家		
所在地	〒028-0526 遠野市下組町11-49		
自己評価作成日	令和7年9月7日	評価結果市町村受理日	令和7年11月26日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

事業所は、「笑顔あふれる第二の我が家」を基本理念に掲げ家庭的な環境で日常生活を安心して楽しく過ごせるように日々のケアに取り組んでいます。利用者が、自分の家に居たらどんな風に過ごすのかと考えながら接する様に努めています。地域の自治会に加入し班長の役割や清掃活動、お祭りに職員が参加しています。地域へ「おらほの家だより」を隔月で回覧し施設の様子をお知らせしています。

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/03/index.php?action_kouhvu
----------	---

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

利用者に自分の家にいるような暮らしを提供したいとの法人の基本理念を基に事業所名を「おらほの家」とし、日々の支援にあたって、利用者を「人生の先輩として敬意とマナーを忘れずに接する」姿勢を常に意識している。職員の確保が課題となっている今日、外国人の職員を採用し、そのさり気ない笑顔で接する姿に利用者は癒され、職員も日々のケアを振り返る端緒になっている。地域においては自治会班長としても活動し、事業所広報誌を回覧板と一緒に配布して事業所情報の発信に努め、また、地域のお祭では職員が余興を披露し積極的に地域との交流に参加し、コロナ禍を経て、ボランティアによる踊りの慰問、神社の神楽の訪問など、地域との交流も戻りつつある。毎月、職員は家族にあてて利用者の生活の様子や通院状況などを手書きの手紙でお知らせしている。家族から好評である。

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 いわたの保健福祉支援研究会
所在地	〒020-0871 岩手県盛岡市中ノ橋通2丁目4番16号
訪問調査日	令和7年9月29日

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる(参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている(参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいが 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある(参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている(参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている(参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている(参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている(参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働いている(参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外に行きたいところへ出かけている(参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごしている(参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている(参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない			

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている。	事業所理念「笑顔あふれる第二のわが家」をもとにして、笑顔で楽しく過ごしていただけるような生活作りを目指している。職員間では生活そのものがリハビリにつながるものと認識して本人のできることを見極めながら介護に努めている。	事業所名の「おらほの家」は、自分の家にいるような暮らしを提供したいとの法人の基本理念を基にしたものである。現在の理念「笑顔あふれる第二のわが家」は、職員が参加した研修会を契機に見直したものである。理念は、接遇スローガンと並べて事務室、ホールに掲示し、毎年度初めに職員間で確認、共有の機会を設けている。職員の確保が難しいなかにあつて、理念にあるように、今年採用された外国人スタッフの笑顔で救われることも多い。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一人として日常的に交流している。	自治会に加入し班長の活動や清掃活動等に参加している。「おらほの家だより」を隔月で回覧していただきグループホームの様子をお知らせしている。コロナ禍で参加出来ていなかったお祭りへは、今年職員が余興で参加しインドネシアからの職員もステージ上で自己紹介し、「どこで働いている分かって安心した」等の声をいただいた。	自治会に加入し班長としても活動しており、回覧にあわせて定期的に事業所の広報紙「おらほの家だより」も回覧している。事業所開設から20年以上経過し、ご近所の方たちとも顔馴染みとなっている。コロナ禍以降久しぶりに踊りの慰問を受けたり、地域の神社のお祭りでは外国人の職員も一緒に参加して余興を披露し、地域とのつながりの維持に努めている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている。	自治会の皆さんに「おらほの家だより」を回覧し、グループホームの活動内容や季節に応じた情報などを提供している。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている。	隣接のグループホームと合同で2ヶ月毎に開催している入居者の取り組みや活動内容を報告している。運営推進会議の委員の方からは地域の情報をいただいたり事業所への質問や助言等といった。会議の内容は、職員間で共有している。	会議は、自治会長、自治会女性部長、民生委員、地域包括支援センター職員、事業所職員で構成し、2ヶ月毎に開催されている。利用者家族へも参加を要請しているが、コロナ禍以降参加はない。委員からの意見、要望として、事業所が持つ専門機能として、認知症に関する情報発信の取り組みや、外国人職員の居住地での生活ルールの周知などの意見が出されている。	

令和 7 年度

事業所名 : グループホーム おらほの家

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる。	運営推進会議委員に地域包括支援センター職員に参加していただき事業所から利用者の活動や取り組み状況等を報告している。また地域の方から相談を受けた事例を相談しサービスつなげていただいた。	地域包括支援センターの担当者とは、運営推進会議において情報交換のほか、事業所として、利用者の要介護認定申請の代行依頼をすることもある。市主催の研修会には主にケアマネジャーが参加している。コロナ禍前は、他事業所との研修、情報交換の機会があり、有意義であったが、現在は途絶えており、以前のような交流の再開を願っている状態にある。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる。	年4回の身体拘束廃止委員会と年2回の職員研修を行い、身体拘束ゼロに向け取り組んでいる。職員間で気づいた事や気になった事は情報を共有し、具体的な行為ごとの工夫を検討し取り組むようにしている。	身体拘束廃止委員会は年4回、研修会は年2回、隣接する事業所(別家)と合同で実施している。両方の事業所に担当者を配置し、テーマを決めて研修に取り組んでいる。気になる言葉掛けなどについては、管理者をはじめ職員間で注意している。また、年1回虐待防止チェックリストにより、前年度と比較しながら支援の見直しに反映させている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている。	研修会を定期的に行っている。「虐待の芽チェックリスト」を実施し前年度と比較して良かった点、悪かった点、改善した点なども振り返り、研修会等で検討している。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している。	親族の方より成年後見制度を利用したいとの相談があり、関係機関との話し合いや利用までの手続きなどの支援をおこなった。その際、職員への情報提供をしながら制度についてや利用までの流れ等を説明した。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている。	契約内容、重要事項説明書、事故発生時の対応等について丁寧な説明を心掛け理解していただけるように努めている。改定時は、前もって電話での説明になる事が多いが説明してから文書を送るようにしている。解約時は家族、管理者他関係者と十分な協議をして行うようにしている。		

令和 7 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホーム おらほの家

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている。	家族の面会はコロナ禍前より少なくなっているの で、面会に来ていただいた時や電話等で連絡 する時は近況を伝えながら要望や思いなどを把 握する様に努めている。毎月居室担当者が様子 を手書きでお知らせしている。	家族の面会の都度様子を伝え、意見、要望を聴 きとっている。毎月、各利用者の担当職員が、生 活状況、通院の状況などを手紙(一筆箋)で家族 に伝えており、ホームでの様子がよく分ると好 評である。家族で誕生祝いをしたいとの申し出 に、事業所内の場所を提供している。利用者から は、入浴時やティータイムでの会話の中から希 望、要望を聞き取っている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の 意見や提案を聞く機会を設け、反映させて いる。	毎日の申し送りや業務、月1回のスタッフミーテ ィングの時に職員からの要望等を聞くようにして いる。出た要望は職員間で話し合い改善できるよ うに努めている。	申し送りやミーティングにおいて、意見、提案を聞 いている。車いすの利用者の入浴に際し、浴槽 にリフト設置の提案があり具体化している。ま た、ホールにある段差のある畳が危ないという指 摘があり、撤去している。センサー増設の要望に も、出来る限り対応している。職員とは年1回所 長補佐が面談し要望等を聞いているほか、資格 取得や希望する研修の受講には、管理者が相談 を受け対応している。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実 績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時 間、やりがいなど、各自が向上心を持って 働けるよう職場環境・条件の整備に努めて いる。	代表者は、日常的に職員と話す機会を持ち、そ れぞれの職員で気になる事があれば管理者へ 情報を共有し改善策などアドバイスしてくれる。 個々の頑張りは認めていると感じる。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケ アの実際と力量を把握し、法人内外の研 修を受ける機会の確保や、働きながらト レーニングしていくことを進めている。	内部の研修会は、職員が講師となり行っている。 他の職員に伝えるために学習するため理解を深 める機会となっている。現在外部の研修を受ける 機会はないが、以前は資格取得のため勤務を調 整し研修を受けれるようにしていた。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流 する機会を作り、ネットワークづくりや勉強 会、相互訪問等の活動を通じて、サービ スの質を向上させていく取り組みをしている。	コロナ禍前は、市内のグループホーム合同での 研修会や親睦会を行い職員同士の情報交換の 機会になり、良い刺激の機会でもあった。今後再 開できればと思う。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている。	入居前に本人、家族と面談し、本人の思いや入居までの様子を把握する様にしている。入居後は、本人の様子に合わせて声かけを多く持つように、安心して生活できるように努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている。	入居の申し込みの時点から家族の困っている事などを聞き取り、入居の際にも事前に家族との面談をし、支援のために必要な事や施設での対応の仕方など相談しながら進めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている。	本人、家族との面談や関係機関からの情報提供等で入居への希望を把握している。面談の内容や家族の希望によっては他のサービスの情報提供や利用申し込み、申請等の支援を行う様にしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている。	簡単な家事や作業を一緒に行いながら、個々の得意な物や経験を活かせる場面作りに努めている。教えていただくことも多くあり、勉強になりますという職員の声もある。本人のできることは、時間がかかっても見守りながら続けていけるように支援したいと考えている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている。	毎月本人の近況を担当職員から手紙で伝えている。体調の変化があった時も連絡し可能であれば受診に付き添ってもらっている。面会時や電話等で連絡を取る時にも日頃の様子を伝えるようにしている。面会時、コロナ禍で玄関での面会をお願いしていたが現在は家族とゆっくりはなせるようにに玄関近くの部屋を使用している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている。	利用者が出かける事は少ないが、友人などが面会に来られた時は感染防止に努めながら短時間だが面会をしていただいている。開所時より2ヶ月毎に来所する美容師さんとは、世間話などをして楽しんでいるようだ。現在は入居前より利用している理容室へと希望がある時は家族の協力も得ながら行けるようにしていた。	ほとんどの利用者家族が月1回程度は面会に来ている。友人が来る方もいる。通院帰りに家族と外食したりしているが、外出や外泊目的で出掛ける方はいない。理容師や訪問診療の医師が新たな馴染みとなっている。地域のお祭りや権現様の訪問も、馴染みの行事である。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている。	利用者間の関係性を配慮しながら、席替えを行ったりお互いに良好な関係が築けるように努めている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている。	別の施設に移られた場合や、入院中の相談などその都度対応している。亡くなられた後の年金の手続きで相談有り対応した。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している。	利用者が自分の思いを伝える事が難しい事もあるので入居前の面談や家族やケアマネからの情報を参考にしたり、一人ひとりの表情や仕草、会話の内容などから本人の思いを把握できるように努めている。	利用者の大方が言葉で自らの意思表示が可能であり、職員の問い掛けに回答できる方も2人いる。要望は、主に食べたい、出掛けたいというものが多く。洗濯物たたみ、新聞たたみ、モヤシのひげ取りなどのお手伝いは、利用者の表情や気持ちを推量りながら、やる気を損ねないよう手伝ってもらっている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている。	本人、家族、関係機関からの情報提供等で把握し職員間で共有する様にしている。入居後も本人との会話や家族からの情報を得るようにしている。		

令和 7 年度

事業所名 : グループホーム おらほの家

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている。	日勤、夜勤ともに時間を追って様子を記録し、一日の過ごし方を把握する様にしている。気になる点は次の勤務者に申し送り様子を観察する様にしている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している。	本人や家族の思いを把握しながらケアプランを作成するようにしている。毎月のモニタリングは担当の職員が行いミーティングで検討し、出された意見等はプランに反映できるように努めている。	入居開始時に管理者が面談し、アセスメントを行い、ケアマネジャーにつないでいる。入居から3か月～6か月を目標期間とし、変化がなければ以降6か月～1年の期間で見直ししている。各担当者がモニタリングし、毎月のカンファレンスで気になっている点などのすり合わせをしながら、検討、確認している。家族の希望等は管理者が聴き取りし、随時ケアマネジャーとも情報共有し介護計画に反映させている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている。	ケアの中で気づいた事や、本人の言葉や表情などを記録に残し職員間で情報を共有できるようにし、モニタリングの時など見直しの時に活かせるように努めている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる。	本人や家族の状況、また相談内容にあわせて必要なサービス等は関係機関などから情報を得るようにしたりサービス利用につなげられるようにしている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している。	入居前からのかかりつけ医への通院の継続のための支援やを行っている。開所時より定期的に来所して貰う地元美容師との会話などを楽しみにしている。コロナ禍前はボランティアの方に来ていただいたり地元のお祭りを見物に出かけたりしていた。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している。	入居前からの主治医に継続して受診している。受診時は利用者家族や職員が同行し、普段の様子や相談したいことを伝えている。訪問診察を利用している利用者もいるので、結果は家族に伝え、職員間でも情報を共有している。	利用者は入居前からのかかりつけの医療機関を受診している。通院時は主に職員が付添いし、家族付き添い時にも職員が帯同していることが多い。受診後は家族に電話で結果を報告し、毎月手紙でも伝えている。歯科等の専門科を希望する場合も職員や家族の付き添いで受診している。訪問診療は1名が利用している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している。	看護師が日勤者のなかに入っているため、日頃の健康状態や身体状況の把握に努めている。体調不良時や急変時には、看護師に連絡する様にしている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時は、病院へ入居中の様子を情報提供し、できるだけ家族と一緒に病状説明を受ける様にしている。退院に向けては、病院関係者から情報を得るようにし、家族と情報を共有しながら退院後のことについて相談する様にしている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる。	入居時に、重度化した場合や終末期について家族に説明し、状態の変化に応じて家族の意向を確認しながら支援していくことを伝えている。現在まで看取りの経験はない。主治医、家族の協力を得ながら取り組んでいけるように研修会など取組めることを行っている。	入居開始時に、重度化対応指針に沿って本人、家族に説明している。看取りを希望される方はいない。不調の際は医師、家族と相談して入院等の対応をしている。要介護3となった時点で特養等への移行について家族と相談している。毎年、研修担当者がターミナルケアに関連した資料を作成し内部研修を行っている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている。	研修会をもち、緊急時に対応できるように努めている。職員からは、もしもの時は不安だと言う声があるので研修会を続けていくようにする。外国人の職員もいるので、分かり易く研修会を持ちたいと考えている。		

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている。	火災を想定した避難訓練を年2回実施し、そのうち1回は消防署立ち合いで行っている。地震時は、被害の状況によるが隣接の別家に避難することで、災害備蓄品として飲料水、食料品などを準備している。自家発電も整備し概ね1週間は対応できる。	事業所はハザードマップでは浸水区域となっている。指定避難所が遠野市福祉の里となっているため、避難距離を考えると早めの情報発信が欲しいとしている。年2回の避難訓練のうち、1回は夜間を想定した訓練を行っている。近所に、職員、法人関係者が住んでいるほか、消防団の屯所も近くにある。災害時の食料品や自家発電装置も備蓄されている。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている。	職員は利用者に対して、人生の先輩と意識して声をかけたり接する様に努めている。トイレや入浴への声がけするときには、ほかの利用者に気づかれないように「お手伝いをおねがいします。」と声をかけたり工夫している。	排泄の誘導には、直接的な言葉は控え、「お手伝いお願いします」などと言い換えて配慮した対応をし、失敗した際には、トイレや居室で介助している。一人ひとりの経歴や得意とすることを尊重しながら、接遇スローガンに掲げる「人生の先輩として、敬意とマナーを忘れずに接しましょう」の視点でケアにあたっている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている。	献立やテレビ番組、日中の活動内容の希望等を聞き取り可能な限り取り入れるようにしている。上手く表せない利用者には、ヒントとしていくつか選択肢を出して選んで貰うようにしたり、本人の話を聞くようにしている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している。	一人ひとりの様子や希望等に配慮しながら、支援する様に努めているが、職員がコロナや病気で休んでいた時期があり、職員側の都合で過ごしていただいた。その時は、食事や入浴などできるだけ楽しく安心して支援できるように努めたつもりである。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している。	季節にあった服装が出来るように支援している。着替えを準備するときには一緒に選んでもらったりしている。髭剃りや髪を整えるなど声をかけたり支援している。好みのクリームの購入やカットの時には希望している髪型を美容師に伝えるなどしている。		

令和 7 年度

事業所名 : グループホーム おらほの家

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている。	利用者は下拵えなど出来る範囲で手伝って貰っている。料理の材料や作り方を教えて貰っている。献立には利用者からの希望があった時は可能な範囲で取り入れるようにしている。行事食ではお赤飯、ちらし寿司お煮しめケーキ、鰻など提供しよこばれた。食べやすい形態で提供し、自分で食べてもらえるようにしている。	献立は職員が作成し、利用者から希望を聞きながらできるだけ希望に沿えるように努めている。調理は職員が行っており、入居者にはモヤシのひげ取り、下膳、テーブル拭きなどの手伝いをしてもらっている。誕生日にはケーキを出している。開所記念日などの行事の日には、ちらし寿司や手作りおやつを提供している。ケチャップを使った料理を好まれる方が多く、コーヒーを嗜好される方もいる。利用者は玄関前の自家菜園で収穫を楽しんでおり、食事にも提供している。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている。	一人ひとりの食事摂取量を確認し体調などに合わせて量や刻み、ミキサーにかけるなど形態を工夫する様にしている。残食があった時は申し送っていき体調など観察する様にしている。水分はとろみをつけたりする。飲みたがらない時は声をかけたり好みの飲み物をきいて出すようにしている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている。	毎食後個々に合わせて、声がけや介助している。口腔ケアが健康管理する上で重要であると職員が理解して支援している。入居時、口臭の気になる利用者が義歯洗浄を声をかけながら行っているうちに気にならなくなり、本人も一人でできるようになった。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている。	利用者それぞれの排泄を把握し、日誌に記録している。時間を見ながら個別にトイレ誘導しただけトイレで排泄できるように、声がけや誘導の方法を工夫している。さりげない声がけで利用者の羞恥心に配慮する様に努めている。	布パンツ1人、リハビリパンツが8人使用しているが、1名は自分でトイレに行くことができる。排泄チェック表を確認しながら誘導している。失敗した際にはトイレで交換している。居室内や寝具に排泄する方がいたが、尿取りパットを見直したり、昼夜を通した観察、見守りなど丁寧なケアにより、トイレでの排泄へと改善している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる。	水分や牛乳、ヨーグルト、野菜など食物繊維を取れるように献立を考えている。入居時毎日下剤を服用していた利用者が、排便の回数や便の状態を主治医に相談し下剤を調整して貰いながら、徐々に量や回数を減らすことが出来ている。		

令和 7 年度

事業所名 : グループホーム おらほの家

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている。	利用者1人が週2回を目安に入浴できるようにしている。通院介助や買物などで曜日は決めれないが、午前午後と利用者の一日の過ごし方も配慮しながら、時間は決めている。入浴リフトを取り入れてからは車イス利用の方や浴槽をまたぐのが困難な方も安心して入浴できている。夏場はシャワー浴も利用している。入浴中は利用者と一緒に会話できる場になっている。	週2回を目安に1日当たり4人が入浴している。リフトを使用する方は4人、ほかに身体洗いなど部分的に介助が必要な方もいる。時期によって、いただいた袖子を使い、袖子湯として提供することもある。異性による介助を拒否される方はいない。職員とマンツーマンで楽しそうに会話する利用者の声も聞かれるなど、リラックスして過ごしている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している。	日中の活動を通して夜間眠れるように生活リズムを整える事を大事にしている。日中でも眠そうな時や疲れているような時は自室で休めるように声をかけている。居室内の照明や温度、寝具等安眠できるようにしている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている。	各利用者の内服薬について効用など把握するようにしている。内服薬に変更があった時は職員間で情報を共有し服用後の様子を観察し変化があった時は主治医に相談する様にしている。薬の形態についても主治医に相談し本人の服用しやすい物にしている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている。	日常生活の中で、楽しみや出来る事を見つけるようにしている。一緒に家事を行ったり、塗り絵や折り紙などを行っている。コーヒータイムや外気浴、ドライブなど希望にあわせて支援する様にしている。歌を聞きたいと希望が多いので対応している。手伝って貰った時は感謝の気持ちを伝えている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している。	コロナ流行前は地域のお祭りや保育園から声をかけていただき見学に出かけていたが、今は交流の機会が持てず外出も少なくなっている。春や秋には桜や紅葉を見に行くなどドライブに出かけるようにしている。	天気の良い日は、玄関前やテラスに出て外気浴の時間をとっている。職員配置上、事業所周辺の散歩はできていない。花見や紅葉狩りなどの行楽を取り入れている。通院の際、好みのジュースを購入したり、遠回りして見慣れた場所に立ち寄るなど、楽しめるように工夫している。小友町にある産直の手作りパン購入のリクエストにも応えている。	利用者から事業所周辺への散歩や買い物などの要望があり、短時間、または近距離の外出の活用を図る等により、楽しめる機会を増やす工夫を期待します。

令和 7 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホーム おらほの家

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している。	入居時に家族と相談し、お金の管理はきめている。現在は1名の方が自分で少額管理し、お孫さんの面会の時に渡すのを楽しみにしている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている。	家族からの電話や希望があれば電話をかけてお話ししていただいている。友人と葉書のやり取りをしていた利用者には、葉書や切手の購入、投函など支援していたが、相手の方の都合できなくしている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている。	建物の中央にホールがあり、花や季節の飾る付けをしている。壁には行事の時などの写真や塗り絵を貼っている。自分の写真を見つけて笑顔になったり会話のきっかけになっている。家族の方も面会の時に見ていただいている。天井に明り取りがあり、光が差し込むようになっている。エアコンとパネルヒーターで温度調節をしている。	ホールは中央に廊下を挟んで両側にあり、キッチン側のホールにはテーブル3脚と大型のテレビがある。テラス側のホールには、ソファ、大型の食器タンスや柱時計が掛けられていて、ゆったりとした雰囲気である。壁面には行事の写真や誕生月の利用者を掲示しており、ススキや、ハロウィーンの装飾も添えられて、季節を感じられるように工夫されている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている。	利用者同士の交流が持てるようにテーブルの席の位置などに工夫している。テーブルとは離れたところにソファを置き過ごしていただいている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのもをを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている。	居室には、入居の時に本人や家族と一緒に置き場所を決めるようにしている。生活していて本人の使い易い様に変えたりしている。家で使い慣れた家具やそばに置きたいものがあれば持ってきてもらっている。	利用者の居室には、エアコン、パネルヒーター、ベッドが配置され、チェストやテレビなど利用者一人ひとりが馴染みの物や必要な物品を持ち込まれている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している。	建物のなかには段差は無く車いすの方も自走できている。居室には、表札を付けたりトイレの表示をつけている。表札の位置も本人の見やすい所になっている。		